

令和2年度第2回兵庫県立図書館協議会 会議録

1 日時及び場所

令和3年3月20日(土) 10:00~12:00

2 出席者

協議会委員 廣岡会長 角本副会長 朝野委員 太田委員 川石委員
崎野委員 仲井委員 春名委員 三浦委員 森玉委員

県立図書館 岡田館長 井上次長
梶本総務課長 谷口利用サービス課長 高宮ふるさと・資料課長

教委事務局 社会教育課前川課長 澤井指導主事

4 議事

- (1) 令和2年度高校生ビブリオバトル大会及び歴史講座の映像を上映
- (2) 令和2年度県立図書館運営状況について
次長より、資料に沿って説明
- (3) 令和3年度県立図書館の取組について
次長より、資料に沿って説明

委員の質問・意見と図書館の説明

- (1) 広報・レファレンス、資料のデジタル化等について

(委員) 広範囲の事業や深いレファレンスの実施には、感嘆している。広報について「くすの木」、「レファレンスの樹」が、施設によって置いてあったり置いてなかったりの状況が見られる。配布方法はどのように行っているのか。新しく図書館ができる養父市も含め県全体に配付してほしい。

(図書館) 兵庫県全域に配布している。

(委員) 自分も、自宅近くの市立図書館や公民館で図書館関係の仕事をしているが、「くすの木」や「レファレンスの樹」は今日初めて見た。特に公民館の図書室には行き渡っていないのではないかと。県立図書館が明石にあることもあまり知られていない。末端にも情報が行き渡るようにPRしていくべきではないか。

(委員) レファレンスについては、大学生や高校生などは学校で調べ方について学習していることもあり、インターネットを活用して、自分で調べるようになり、レファレンスが減少傾向にあると思う。今後もこのような傾向が続くのか。

(図書館) 「ググる」という言葉があるように、確かに自分で検索している傾向が強くレファレンスは減少している。しかし、ググっても出てこない深いところの情報もある。図書館としては、その深いところのレファレンスを今後も行っていく。

(委員) 自分は資料を配付する側の立場になった経験があるが、配布先の人員や設置スペースの不足などの理由で、配布してもなかなか置いてもらえなくて苦心した。
しかし、発信を継続することが重要。データベース化して検索できるようにするのも有効。

ホームページは職員が作成しているとのことだが、とても大変な作業だ。閲覧者が離れないように見やすくする工夫が必要。また、情報発信において、SNSは重要である。ホームページは利用者が情報を得るために見に行く必要があるが、SNSは登録、フォローを行えば、新着情報がお知らせとして入る。ツイッターはバズれば一気に広がる可能性がある。手段として考えてみてはどうか。

(委員) デジタル化について、令和2年度は何らかの形で予算化し、久しぶりに実施できたのか。

(図書館) そのとおり。

(委員) 作文コンクールの審査員をしているが、コロナの自粛生活をきっかけに、文章を書く人が増え、応募者が増えている。書く人が増えているということは、読む人も増えているは

ず。

兵庫県立図書館ならではのキャッチコピーをホームページに載せるのはどうか。街なかにある図書館とは違うアナログな環境を活かすべき。

明石市にはライツ社という出版社があり、ベストセラーを出すなど注目をあびている。たとえば、地元の出版社ごとに本をまとめて並べるのはどうか。

重厚な雰囲気の館長室や屋上をロケに使ってもらおうというのも有効ではないか。

(2) 広域的な図書館連携について

(委 員) 「はりま圏域8市8町相互利用図書館」という取組を知り、実際に居住している市以外の蔵書を借りようとしたが、手元に届くまでに3週間、送料がかかるなど、なかなか利用しにくかった。もっと使いやすい仕組みにすべきではないか。

(図 書 館) 当館では、県民が読みたい本を市町立図書館を通じて貸し出す「協力貸出」を行っており、週に1回、市町立図書館あてに本を配送している。

(図 書 館) 連携しても輸送の問題があり、どうしても日にちがかかる。

(委 員) 県立図書館の本が、市町で借りられることをもっとPRすべき。Q&Aを作成する等手続きを知ってもらおう工夫をする必要がある。

(3) 電子書籍や資料購入のための予算等について

(委 員) 電子図書館について、前回も早急な対応をお願いしたが、どうすれば実現するのか。運営状況の協力貸出の内訳を見ると、大学・高専図書館が減っている。コロナ禍において電子図書館は時代の流れであり、長期的課題とするのはおかしい。他府県で導入できているのに兵庫県ができない理由はなにか。

また、寄付金等外部資金獲得の取組みについて教えて欲しい。

(図 書 館) 県立図書館が収集方針としている専門書の電子書籍はまだまだ少なく、価格も紙媒体の2~3倍。資料購入の予算が2000万円程度の状況では、予算を有効活用する意味でも、資料の永久保存が可能な紙媒体の本を優先させざるをえない。近畿地区の都道府県立図書館長の会議においても同様の意見であった。

外部資金については、ふるさとひょうご寄付金「県立美術館・博物館等応援プロジェクト」で寄付を募っている、寄付が集まれば予算化できるが、まだ100万円未満しか集まっていない状況である。

(委 員) 設立された時の「県立図書館と市町立図書館と役割を棲み分ける」の考え方が現在も変わっていない。蔵書構成もそのような考え方の上になりたっている。

(4) コロナ禍における図書館について

(委 員) 「図書館の新型コロナ対策ガイド」という本を紹介したい。コロナ禍という未曾有の状況下で、その状況が既に2年目に入っている。この状況を統計的な視点で押さえて記録し、対応の検証をして欲しい。この本では、電子書籍についても分析されている。予算の面に関しては、県立図書館が指導して、市町立図書館との共同的な利用をしてほしい。そのような仕組みがあればカバーできることもあるのではないか。資料費2000万円は県立図書館としては少ない。ふるさとひょうご寄付金については、知らなかったのもっとPRすべき。

(委 員) ビブリオバトルはコロナ禍にありながら、とても良かった。来年は参加校を増やしてほしい。やはりYouTubeなどで発信することが大切。学校でも読書推進の声かけなどをしていければと思っている。

(委 員) コロナ禍で本が売れなくなっている中、自分はWebでの発信をしており、Webの力の大きさを実感した。兵庫県図書館のこともWebで発信したいと思っている。

(委 員) コロナ禍での経験を、サービスの向上につなげる「気づき」はないだろうか。単に大変だったと言うだけでなく、コロナからの気づきを社会に還元していく時期を迎えている。

お城に関する講座をしているが、今神戸新聞で「ひょうごの城」という記事を載せている。2019年に兵庫県の観光キャンペーンで、お城を取り上げている。今城が更に注目されている。

SNSの世界は、今、「見る」から「聞く」にシフトしていつている。これからは音声コンテンツの時代となってくる。神戸新聞でも高齢者に対して、読み聞かせのサービスを考えている。

(5) その他、全体的な課題について

(委員) 予算が少ないことがいちばんの問題である。教育委員会は、知事部局にそのことを訴えてほしい。

(委員) 図書館は子どもを育む場でもあると思う。子どもの体験活動を大切にしたいと考えている。子ども達が、ビブリオバトルの参加者の高校生のように、自分の意見を述べられるようになったらいいと思う。

(委員) 市町と連携による本の貸出しの手続きについて触れたが、「どこかには本がある」という便利な面があると思っている。また、県立図書館の建物や環境の良さを大切に活かしてほしい。

(委員) 県立図書館は建物が素晴らしい。屋上などの屋外利用も考えてほしい。また、わずか32人の職員でこれだけの様々な事業をしているのは賞賛できるが、スクラップアンドビルドして、集中させてはどうか。

例えば、明石城ツアーとのコラボとか、建物を有効活用してほしい。明石駅からのアクセスについてもバスを走らせるなど何かできないか。

(委員) 「くすの木」を職員が作っていることは素晴らしい。大変な作業だけに、紙面をみると、「もったいない」と思う。作ったものを読んでもらうためには、文字数や伝えたい情報を絞るなどの工夫がもっとできると思う。

司書として勤務の経験から、司書の専門性はなかなか人に認知されにくい。司書自らが自分たちの専門性や役割について、館内外にPRする必要がある。それが、人員や予算が減らされないようにするための努力である。